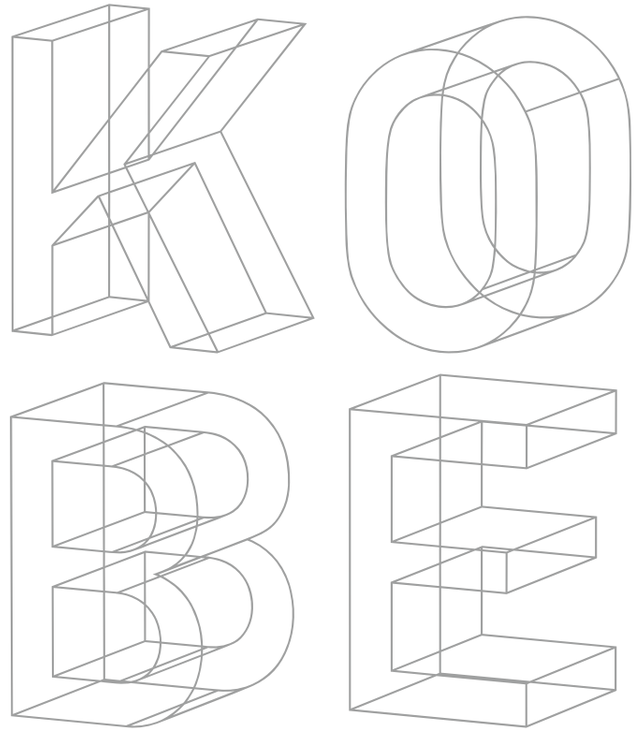
KOBE STUDIES #4

KITO:
DESIGN AND CREATIVE CENTER KOBE
神戸スタディーズ #4

“KOBE”を解(ほぐ)す



せめぎあいにみる神戸の都市史

“KOBE”を解す（ほぐ）

せめぎあいにみる神戸の都市史

"KOBE"を解す—せめぎあいにみる神戸の都市史　村上しほり ——— 6

1　都市を読むために　—不可視な履歴と都市イメージを辿る
「都市史」とは何か？ / KOBE——神戸というまちのイメージ
陳舜臣と1965（昭和40）年の神戸 / 戦後神戸の観光案内書 / “国際的な観光都市”
近代観光地としての湊川新開地 / 鉄道整備と三宮の市街化

2　戦後、災後のまちの蠢き
第二次世界大戦による神戸の空襲被害 / 終戦直後のまちの姿
焼け跡に生まれた「闇市」/ 闇市へのまなざし / 闇市を明らかにすることの難しさ
日本の居酒屋という空間 / 神戸における飲食店の集積
［Report］接収期のKIITO

3　占領軍と神戸のまち
想起しがたい占領下神戸の記憶 / 神戸への占領軍の進駐開始
接収地と地域住民のせめぎあい “イースト・キャンプ”
接収地と地域住民のせめぎあい “ウエスト・キャンプ”

4　神戸における公共空間の “モニュメント”
“その場所”を知るために / みなとのもり公園 / 東遊園地
“モニュメント”の転換点 / “震災モニュメント”の発生

5　都市空間の変わる契機—神戸というまちの戦後
戦後神戸というまちのあゆみ / 災後の変化——伝えたい衝動の発露
災後、復興期のくらしの記憶 / 出来事や集合的記憶を媒介する都市空間
［Report］三宮まち歩きのススメ
［Report］都市のあゆみを刻むモニュメント

開催概要 ——— 32
神戸スタディーズ#4を終えて　芹沢高志 ——— 34
神戸スタディーズとは・講師プロフィール ——— 36

1935A ── 戦前の三ノ宮駅南側。そごう神戸店と市電、阪神三宮駅につづく地下道入口が見える(a)
1935B ── 神戸市役所前フラワーロード付近(b)
1938 ── 阪神大水害後、復旧に働く女性たち(c)
1945.12.10 ── 大丸元大丸元町店屋上より占領軍撮影。山並みを背に傷ついた神戸の街並みが見える(d)
1945-46 ──ヤミ市にて山積みされた釜(e)
1946 ── 元町駅下の店舗とゆきかう人びと(f)
1947.09.23 ── 米軍の撮影した三宮―神戸一帯の空中写真(g)
1950-55 ── 国鉄三ノ宮駅の改札口付近に立つ子(h)
1969 ── 三宮市街地改造事業により建設途中のさんプラザ(i)
1995 ── 阪神・淡路大震災直後の被災した高架橋(j)

歩く。
そこに続く
人びとの営為を
感じる。

都市をみる。考える。

神戸スタディーズ#4「"KOBE"を解す―せめぎあいにみる神戸の都市史」は、
2016年1月～2月に、都市史研究者の村上しほりさんを講師にお招きして開催した企画です。
本冊子はその成果物として、レクチャー、フィールドワーク、トークセッションの形式で行われた
全3回の企画内容の軸となる村上さんの論考を収録し、制作しました。
さまざまな角度で神戸のまちに残る痕跡を辿り、
戦争、占領期、経済成長、災害など、神戸のまちが変化する大きな契機に加え、
人々のくらしの営為やせめぎあいを想像しながら、都市空間の読み方を学んできました。
本冊子は、論考に加え、当日スライドショーで紹介した図版、フィールドワークの記録等を収録し、
企画開催時とはまた違った角度で"KOBE"を解す楽しみを味わえるような内容にしました。
じっくりと読んでいただければ幸いです。

デザイン・クリエイティブセンター神戸

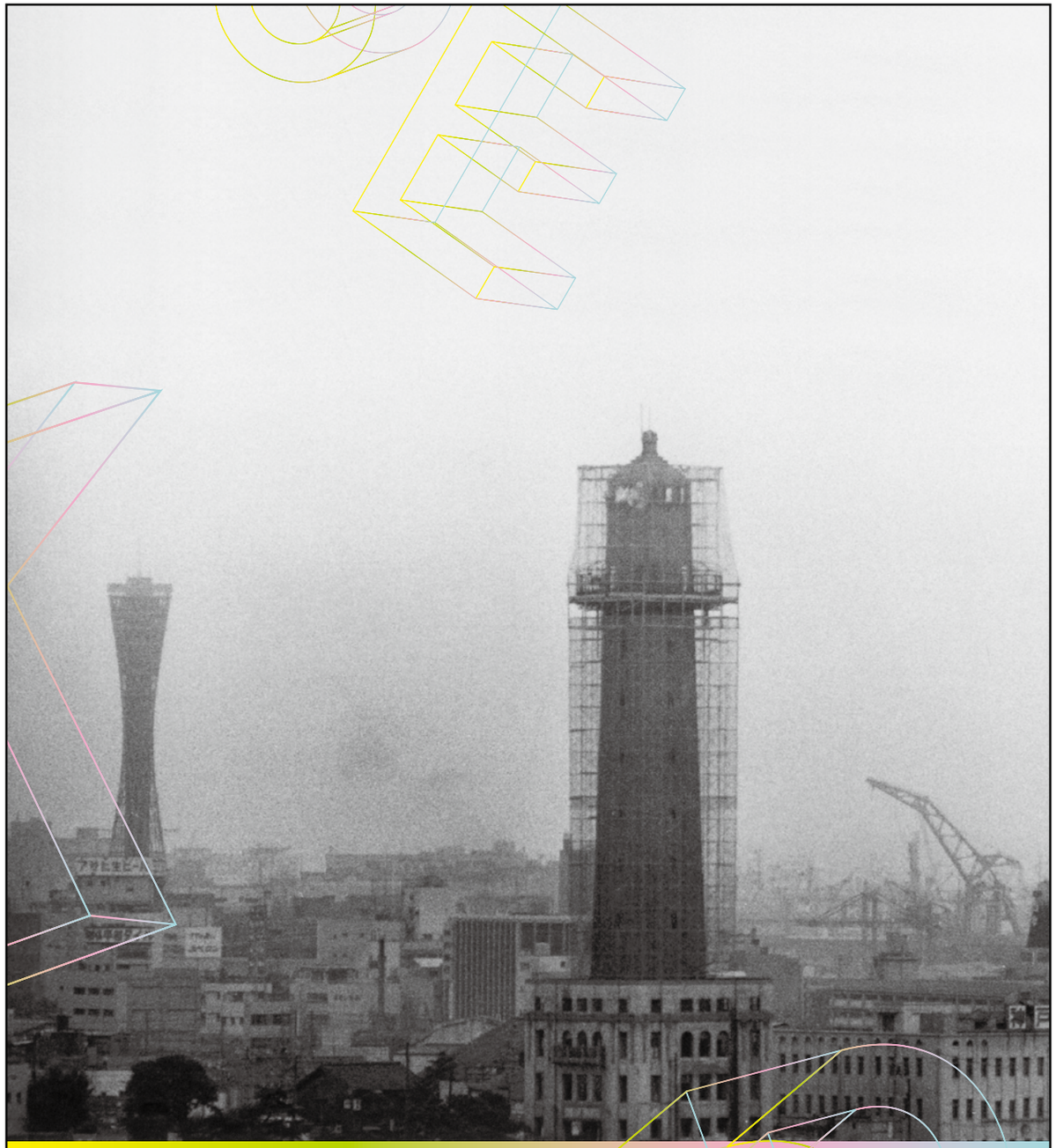
(a)～(c),(e),(h),(i)神戸市文書館所蔵,(f)神戸市文書館架蔵(河内恵一郎所蔵),(d)米国国立公文書館所蔵,(g) 国土地理院(USA-M496-34),(j)人と防災未来センター所蔵(0000072-001001)

1946 ― 鯉川筋ガードより三宮を眺める。緑地帯にはバラック群

①高架下の橋脚周りには、組み立て式の床店（とこみせ）が多く集まっている。②三ノ宮駅の南側から元町方面に現れた「三宮自由市場」には多くの人びとが犇めきあう。③戦災に耐えたそごう神戸店（1933年開業，地上7階・地下2階）④神戸大空襲後に焼け残ったのはわずかなRC造の建物だった。⑤緑地帯に建ち並ぶバラック群には「中華公司喫茶 Chinese Tea Room」の看板も掲げられた。手前の鯉川筋を南に下ると右手に老舗の元町商店街、南京町、左手にはGHQに接収された大丸神戸店が見える。

元町駅のホームから降りる階段はかつて南北の街路側にあった。この写真は、GHQの進駐アメリカ兵として来神したHarvey B. Arndt氏が、駅南東の階段踊り場より撮影した。軌道と近いやや高めのアングルで高架南側街路を写していることから、踊り場の屋根に上ったのではないかと察せられる。

Harvey B. Arndt撮影, Gerald C. Arndt所蔵



"KOBE"を解す

せめぎあいにみる神戸の都市史

村上しほり

1. 都市を読むために　―不可視な履歴と都市イメージを辿る

「都市史」とは何か？

「都市史」とは何かと問われることが多い。分野を説明し得る力量はないが、はじめに定義と私の認識に触れたい。2013年に設立された都市史学会は「都市史」を次のように語る。

“ 都市の歴史を辿ることは、人間の居住履歴を批判的かつ冷静に再検証することにほかならない ”

“ 近現代化の過程の中に見失われた（中略）固有の価値を現代的視点から見直すこと ”

「都市」とは多様な人びとの居住の場である。その変化は激しく、あっという間に更新されて、気が付いたときには前の姿を思い出せないこともある。さまざまな人びとが集まり暮らすということは、新たな交流が芽生えたり、各人の利害が衝突したりする可能性を抱えている。

その時々に自らの暮らす場について考えることに加えて、しばらく時間が経ってから、場所の履歴の示唆することや価値を再検証してみるのも面白いもの。長くひとところに住んでいても、知らないことは意外とたくさんある。いつもよりすこし引いたり、入り込んだり、ずらしたり、と揺らす視点から、神戸のいま―むかしに親しむ機会になれば幸いと思う。

KOBE――神戸というまちのイメージ

神戸というまちのイメージは、ある程度広く共有され、ブランド化されてもいる。2016年現在、たとえば旅行案内本で神戸の魅力はこんなコピーで紹介されている。

「オシャレで異国情緒あふれる港町・神戸」

「古い洋館が集まるエキゾチックな坂の街　北野」

「食べ歩きが楽しい活気あふれるチャイナタウン　南京町」

「買い物が楽しい神戸のターミナルタウン　三宮・元町」

その大半には「異国情緒」が掲げられ、どうやら北野と南京町が人気スポットらしい。夜景も函館、長崎と並ぶ日本三大夜景に挙げられ、デートスポットとしても有名だ。

しかし、この観光資源からは、近現代神戸における居住の実態が感じられない。地元神戸がどうしても気になり辿ってきた私には、神戸というまちの戦後の変化は、一元化される都市イメージからだらだらとこぼれ落ちているように感じられる。語りたいこと、語りたくないことは、時が流れるにつれて変化するもの。個人差はあっても、ある程度まちで共有されているものだ。

陳舜臣と1965（昭和40）年の神戸

少しさかのぼって神戸の中から語られたイメージを見てみよう。

陳舜臣は1965年に「神戸というまち」という初めてのエッセイを出版した。1965年―昭和40年―とはどのような時代だったのか。1966年にポートアイランドが着工する1年前。三宮の駅南には木造家屋が密集し、いまマルイが建つ場所には「ジャンジャン市場」というバラック飲食街があった。1917年に開業した神戸市電はまだ元気に市内を走っていた（1971年廃止）。1963年に竣工したポートタワーは中突堤を彩り、まもなく1968年には湊川公園に建っていた神戸タワーが取り壊された。「神戸というまち」のまえがきには、次のように記されている。

> “人間は誰でも他人に自分を理解してほしいと思う。快適に生きるためには、そうした努力は必要なのだ。神戸も理解されることを望んでいる。私の文章がそれをはたせたとは思わないが、すくなくともそのつもりで書いた。”　陳舜臣『神戸というまち』至誠堂新書　1965年

戦後神戸の観光案内書

さらにもう少しさかのぼってみよう。1954年―昭和29年―に神戸市が神戸の観光資源をまとめた冊子を刊行した。大都市としては狭い市街地であった神戸市は、東西北部に市域拡大を果たし、面積が479.8㎢に達したことを誇る。また、「六甲連峰の線」を背後に有すること、「天然の良港と近代的設備」によって「太平洋を越えて、パナマ、ニューヨークに、印度洋を渡ってスエズ、マルセーユにと外国航路の船で殷賑を極めている」ことも挙げられた。

> “まことに新生日本の表玄関神戸こそは史跡と伝説にとみ、名勝と文明とのあやなす国際的な観光都市というべきでしょう。”　神戸市経済局・神戸国際観光協会『KOBE 観光神戸』　1954年

“ 国際的な観光都市 ”

国際的な観光都市――それは国際港を有する神戸の拠りどころであり続けた。

戦前期に目を転じると、1930年代は、日本の観光行政にとって転換・躍進の時代であった。1927年に経済調査会から「国際観光の振興」に関する答申が出され、1930年に鉄道省に設置された国際観光局によって外客誘致の観光宣伝活動が始まった。翌年、神戸市では秘書課に観光に関する機関が置かれ、1934年には神戸市観光課となって観光開発が積極的にすすめられた。ここで注目したいのは、「観光」の政策的始まりは国際観光にあったという点だ。港から受け入れた外国人観光客の集客・外貨獲得をもたらすインバウンドが目指され、国内観光はあくまでもその過程のインフラ整備によって移動が容易になった“ 副産物 ”であった。

近代観光地としての湊川新開地

当時の神戸市による観光案内書には「史蹟名勝」が主立った観光資源として紹介され、その多くは山・海・滝等の自然観光と社寺であった。しかし、現代でいうところの都市観光（アーバン・ツーリズム）に相当するものとして、繁華街の湊川新開地と大商店街の元町通も登場する。湊川新開地は戦前神戸の中心地であった。1901年湊川の付替に伴い埋め立てられ、1911年には市の改修工事によって約36,000㎡に及ぶ広大な湊川公園が開園した。1924年には公園南側に高さ90mの神戸タワーが建設された。「東の浅草、西の新開地」と称されたように、新開地通りの盛り場としての賑わいとランドマークとなるタワーは、神戸における近代観光地の誕生であり、1923年9月に関東大震災で被災して解体された高さ52mの浅草の凌雲閣を意識したものでもあった。同時期、東京の浅草、京都の新京極、大阪の道頓堀、千日前が盛り場・新開地の比較対象として挙げられ、当時の市内におけるまなざしも窺える。また、湊川公園は様々な日常的な催しや博覧会の会場になり、内外の人々の訪れる場所であった。その位置づけは、戦後、王子公園に次いで第2会場となった日本貿易産業博覧会、通称「神戸博」（1950年）においても変わらない。そして同時に、戦前も戦後復興においても、博覧会や祭りは都市開発の契機であった。

鉄道整備と三宮の市街化

新開地が賑やかであった戦前期、三宮は繁華街としても商店街としても語るに及ばないエリアに過ぎなかったが、1936年に神戸阪急ビル（阪急会館）が完成して映画館が開館してからは、新たなアミューズメントエリアとして注目を集める。1930年以降、三宮に JR、阪神、阪急が乗り入れてからは急速に市街化し、鉄道駅の存在がどれほど地域の賑わいと密接な関係にあったか察せられる。なお、JR 高架橋も1931年に完成して高架下空間の利用は大いに期待されていたが、戦局の深まりによって新たな建設も叶わず、空地（一部倉庫）のまま終戦を迎えたのであった。

a

b

a. 1935年 湊川公園南端の神戸タワー
b. 1937年 阪急会館北側をゆく人びと
（a, b：神戸市文書館所蔵）

2. 戦後、災後のまちの蠢き

第二次世界大戦による神戸の空襲被害

第二次世界大戦後の神戸のまちは焼け野原に始まった。当時の中心地であった新開地や新しいまち三宮の空襲被害は大きく、木造家屋はことごとく失われてしまった。神戸とその周辺地域は、1945年1月3日から終戦までの約8ヶ月間に大小あわせて128回の空襲を受けた。特に西神戸の兵庫区や旧林田区などに大きな被害を出した1945年3月17日と、東神戸および阪神間の町村を壊滅させた同年6月5日の市街地絨毯爆撃と川西航空機甲南工場を標的とした5月11日の戦略爆撃によって大きな被害が生じた。

終戦直後のまちの姿

終戦直後のまちの写真を見ても残っているのはまだ新しかった鉄道駅舎、高架橋、鉄骨造の建築物ぐらい。一見したところまるで人の暮らしがなかったかのような廃墟の風景である。しかし、近くに仮小屋を建てて暮らし、生業を再建する機を待った人々もいた。めいめいに疎開していた人々も、働き手の父親と息子だけでまちに帰ったり、混乱する都市部の情報を伝え聞き、しばし落ち着きを待ったり、学童疎開から帰る幼い妹を引き取るために浮浪児となり阪神地下道に暮らした戦災孤児たちもいた。

焼け跡に生まれた「闇市」

失われた生活環境では物資が足りなかった。家屋を再建しようにも資材は不足、食料も1945年秋の不作と統制経済の混迷で配給が遅れ、衛生的な生活のための衣類や医療品も価格高騰で手に入りにくかった。いまの自分たちに必要なものを補うために、各人が知恵を絞り、行動した。親戚が戦災を受けていない地域にいれば、米をもらいに超満員の列車に乗り込んだ。戦前に働いていた勤め先の人脈を辿って物資を調達したり、それを売買する新たな商売を始めたり。わずかに残った家財や衣類を売ったお金で、配給では足りない日々の食料を求めることもあった。

そうした状況下で、駅前や広場などの公有地に立売り、露店、屋台等の店を開く商人が現われ、客を集めて急速に規模を拡大、「闇市」と呼ばれるようになった。闇市とは物価統制が形骸化しつつ残った時期に、公定価格を外れる価格で売買する店舗が集まり市場の様相を呈したものである。不法占拠であったかはケースバイケース。発生初期には地方自治体が期限付、価格制限で許可を出した例も多かった。次第に売買される物資が悪質なものになったり、価格が法外になったりしたため、警察が出動して取り締まることも多かったが、すべて撤去する方針になったのは、発生から一年後の1946年8月のことであった。

闇市へのまなざし

第二次世界大戦後、全国的に駅前などに「闇市」が発生。神戸にもまた三宮や元町の高架下や各所に闇市が現れたことは知られている。ただし、1945年9月に生まれてから1年の間に社会も空間も大きく変容したため、その実態は把握されてこなかった。語り継がれてきた闇市の姿と、同時代的に報道され記録された三宮の闇市を含む商業地の復興とを認識しようと、1945年から1950年頃の『神戸新聞』の地方面をすべて読んだ。当時を生きているような臨場感で見たまちの動きは、想像以上に複雑だった。

まず闇市に付帯する問題は大別すると、統制違反と不法占拠である。前者は社会経済、後者は土地管理にかかる別件であるため、どちらに関心があるかで議論の焦点も変わるところが難しい。闇市の論じられ方、語られ方はどのように推移したのだろうか。

その始まりともいえる同時代の社会政策学者・大河内一男らによる研究と、社会学者の松平誠による研究は対照的だ。大河内は1947年の実態調査を行い、闇市の封建的な性格を批判した。松平誠は闇市を「ヤミ市」とカタカナ表記にしたうえで、ヤミ市は「「本音」の世界の砦であり庶民生活のエネルギーの源泉であった」と評価した[1]。つまり、闇市が祭や聖域に通じる祝祭空間とみられる流れは松平がつくりだしたと言えよう。

『やくざと日本人』(三笠書房 1973年)で知られるフリージャーナリストの猪野健治は「連載:東京闇市興亡史」[2]で闇市について、亀井トムの「自然発生的に成立した泥棒市」との言を否定する文脈で、「私はヤミ市は解放区だと考えている」「既存の価値観、秩序、法律、思想をのり越えた地平にヤミ市は出現した」と語った。

社会学者の橋本健二は『盛り場はヤミ市から生まれた』(青弓社 2013年)において、闇市の歴史的意義を社会と空間の両側面から、大規模な社会移動のルートとなり戦後の都市商業を

c

d

c. 1946年　そごう神戸店から三宮駅南のジャンジャン市場方向を望む
d. 1947年6月　三宮高架下の自由市場
(c: 神戸市文書館所蔵, d: 兵庫県立神戸高等学校所蔵)

担う自営業者層を形成し、新しい商業地域や盛り場を生み、都市の空間構造を変化させた存在と位置づけた。

闇市を明らかにすることの難しさ

物流・経済についてのみ考えると、闇市は破綻した統制経済を補う役割を負った面もあり、猪野の認識も間違いとは言えない。しかし、一時的に与えられた許可で公有地を長年にわたって不法占拠し続ける事態を招いたことは確かで、「解放区」「自由空間」「アジール」という語で表現するのは不適切である。また、賑わいを活かした繁華街や夜市の成立という単線的な発展イメージは、戦後日本の各地の闇市のケーススタディを調べると限られた例に過ぎないとわかる[3]。過渡的な商業集積を恒久的な存在に切り替えるためには、様々な条件が揃わなくてはならない。なお、空間的な意義については継続的に検討しているが、地方を含めた全体像の把握は容易ではない。

日本の居酒屋という空間

闇市を自由空間とみなす向きとは別に、鳴海邦碩は都市の自由空間（人々の利用に開かれた空間≒オープンスペース）の機能を分析し、生活環境にもたらす充実感に言及した[4]。日本の盛り場の特徴について、小規模な土地や建物の所有が、店舗の小資本での業種転換を可能にしているという。その系譜を辿ると明治以前より社寺境内盛り場として発展した新京極などもあるが、戦災都市の小規模店舗集積の盛り場には、闇市に生まれたものも少なくない。鳴海が、戦後繁華街の現代性は諸施設のダイナミックな新陳代謝により保障されていると述べたように、商店街は空間変化を受入れつつイメージコントロールを図る必要がある。現代の繁華街に目を向けると、小さな店舗は食堂になったり、飲み屋になったり、服屋になったりと、代謝がきわめて激しい。小飲食店、特に居酒屋などの集まるエリアには、自然発生的にも見える店舗集積に独特の魅力を感じ、集まる人が多いようだ。

レイ・オルデンバーグは「サードプレイス（第三の場所）」を「インフォーマルな公共生活の中核的環境」と位置づけた[5]。それは、家庭と仕事の領域を超えた個々人の、定期的で自発的でインフォーマルな、お楽しみの集いのために場を提供する、さまざまな公共の場所の総称であるという。“The Great Good Place” という原題や “コミュニティの核となる「とびきり居心地のよい場所」” という魅力的な邦訳サブタイトルに負けない、オルデンバーグのサードプレイスに向けて記した愛ある批評が印象的だ。

同書の解説や『日本の居酒屋文化 赤提灯の魅力を探る』（光文社 2014年）を記したマイク・モラスキーは、日米の生活環境の差異に目を配ったうえで、日本の日常空間で他者との楽しい会話を求めるなら、赤提灯や大衆酒場のような庶民的な居酒屋に行けばよいと思う、と述べる[6]。たしかに庶民的な、また個人営業の居酒屋は日本において例外的な空間かもしれない。

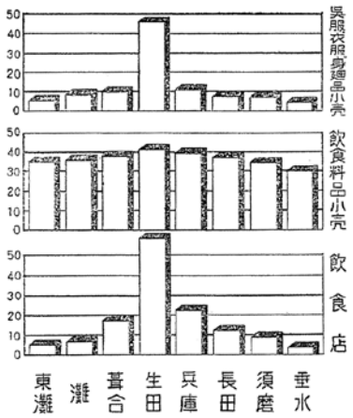
また、橋本健二は階級論を専門とする社会学者の目線から、居酒屋を呑み歩きつつ店の内装や客層などを観察する。『居酒屋ほろ酔い考現学』（毎日新聞社 2008年）では、格差社会と貧困の拡大への批判に加えて、豊かな文化を守り育て、安定した社会を維持するために、「誰でも酒が飲める社会を」「誰でも居酒屋へ行ける社会を」という要求を語った[7]。

神戸における飲食店の集積

さて、神戸の飲み屋街は、とかく旧生田区に集中している。1952年の商店数調査を見てみると、呉服・衣服・身回品小売業、飲料品・小売業、飲食店ともに生田区がトップで、何よりも飲食店の多さは他区と比べようもないほどだ。次いで多いのは兵庫区であるが、この時期すでにこれらの地域がビジネス活動の中心地であるとともに、繁華街を控えて市民が多く集まったことが読みとれる。別の傾向としては、飲食料品・小売業の割合が東灘、灘、須磨、垂水区に多い。これは、住宅地を控えた郊外地区の消費形態が繁華街とは異なるためだろう。

いまや「生田区」と「葺合区」の表記は見慣れぬものとなった。1980年に、フラワーロードを隔てて東の葺合区と西の生田区は合併して中央区となった。生田区は三宮と元町、葺合区は三宮東と春日野を擁し、前者は商業、後者は工業の性格が色濃い。特に、戦後まもない時期の三宮の闇市の繁栄は顕著で、小規模な飲食店の目を見張るような多さはこれに始まったと言えよう。それまでの地歴も大きく異なる二つの区には、見えない区界がいまも残る。そして、闇市の発生から復興、都心としての地位を確立していった動きからは、三宮というまちの構造が垣間見える。

e. 1952年9月　神戸市内の区別業態別商店数
（e：神戸市教育研究所『大神戸』1954年）



Report

vol. 001

接収期のKIITO

KIITOは、1927年、32年に建てられた旧生糸検査所をリノベーションして利用しています。
第二次世界大戦後はGHQの接収を受けて室内遊技場として用いられていたそうで、
接収時の痕跡は、現在もKIITO館内に残ります。1945年10月28日付の神戸新聞で報じられた
接収から一ヵ月が経った頃の兵士たちの様子を、ここに紹介します。

①② KIITO 1階通用口前にある、消えかけた「OFF LIMITS」の表示
③ 神戸新聞記事（1945年10月28日付2面）

①

②

S.S.O

1927年に建てられた葺合区浜辺通8丁目の旧生糸検査所は、戦災による破壊を免れたが、1945年9月末に接収され、1952年5月16日に全面接収解除となった。

その1階には、スペシャル・サービス・オフィス（S.S.O）によって、室内運動場や読書室、喫茶売店などの設備が整えられた。占領軍の生活における文化・娯楽的要素の提供を担ったS.S.Oは、日本語では「奉仕部」や「特殊事業部」を意味した。ここでは、書籍、雑誌、映画、音楽、運動競技などを楽しむことができた。また、謄写版刷・タブロイド4ページの日刊師団新聞「ギニイ・ピッグ」も発行していた。同紙は、試験的に、イリノイ大学新聞科出身の3名が編集に携わって2500部を発行していたといい、guinea pigという名称はモルモットの意であった。

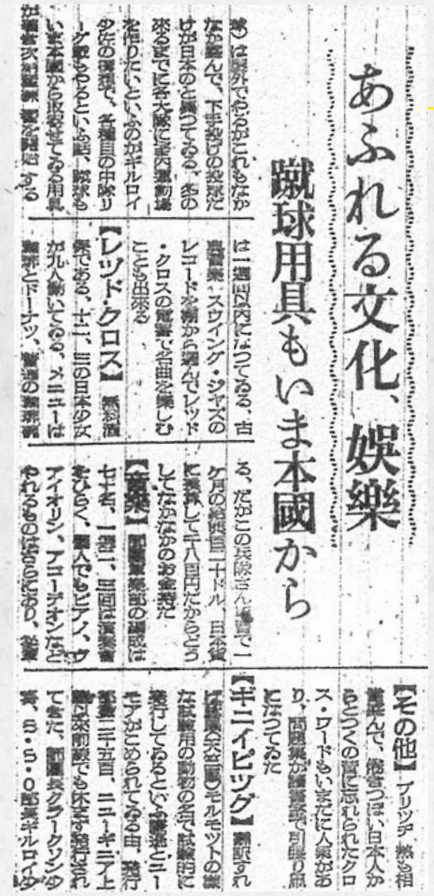
旧生糸検査所1階には、室内運動のためにバスケットボール、バレーボール、テニス、ピンポンの設備があった。ここでは、上半身にシャツを着るか着ないかの軽装で楽しそうにスポーツに興じる兵隊の姿が描かれた。当時のアメリカで流行していたソフトボールも屋外で行われたほか、サッカーのための用具も取り寄せたという。

約3000冊の蔵書を揃えた「デイ・ルーム」という読書室は、9時から21時まで開かれ、1週間以内の貸出も許可された。軍隊用に出版された縮刷版の探偵小説や怪奇小説に、雑誌、運動競技に関する書籍のほか、古典音楽やスウィング・ジャズのレコードも楽しめるよう電動蓄音器が置かれた。音楽を好む者が多く、70名で編成する国際音楽部が週に2、3回の演奏会を開き、映画においても音楽喜劇が人気を博した。当時は「人気歌手リタ・ヘイウォースのうたう天然色音楽映画がすばらしく受け、京都、神戸、宝塚、姫路の各宿舎で一週50回も上映」されていたという。これは、1940年代にセックス・シンボルとしてさまざまな雑誌の表紙を飾ったニューヨーク出身の女優、Rita Hayworth（1918–1987）の出演映画と目される。

喫茶スペースは「レッド・クロス」と呼ばれ、12、13歳の日本人の少女9人が働いていて、日本語で催促する兵隊もいたという。メニューは大きなカップに注がれたコーヒーとドーナッツで、ミルクも砂糖もセルフサービス、すべて無料であった。

このほか「日本的なものを見、日本趣味の記念品—刀剣、書画、キモノ、日本人形、扇子などなど—を漁る」ことも彼らの軍務の余暇と記され、これらの記念品の高さを占領軍兵士は話した。

———「進駐軍営内をのぞく」『神戸新聞』1945年10月28日付より



あふれる文化、娯樂
蹴球用具もいま本國から

は二週間内にはつてゐる、古典音樂、スウイング・ジャズのレコードを初から揃へてレッド・クロスの蓄音で全曲を楽しむことも出來る

【レッド・クロス】無料酒場である、十二、三の日本少女が九人働いてゐる、メニューはコーヒーとドーナツ、蓄音の無料演奏

る、だがこの兵隊さん達で一ケ月の給與百二十ドル、日本貨に換算して二八百円だからどうしてなかなかのお金持だ

【娯樂】部隊娯樂部の演奏は七十名、一週二、三回は演奏者をひらく、素人でもピアノ、ヴァイオリン、アコーデオンなどやれるものはなるべくあり、各種

【その他】ブリッチ、絵の相撲遊んで、絵葉書つきの日本人からとつくの昔に忘れられたクロス・ワードもいまだに人氣があり、問題集が購買部で引張り凧となつてゐた

【ギニイ・ピッグ】翻訳すれば試驗兵（天竺鼠）モルモットの意味で試驗用の動物の名で、試驗的に発行してゐるといふ意味とニーモアがこめられてゐる由、発行部數二千五百、ニューギニア上陸の次前線でも休まず発行されてゐた、部隊長グラークソン少佐、S・S・O部長ギルロイ少

日刊新聞「ギニイ・ピッグ」2500部発行！

工場も交通も教育も

食糧は・すべてはて糧食はて決戦

くぞのを内營軍駐進

學童授業も食中心

政治力の貧困が食糧問題の原因

飢えの死體 神戸に日増し大

あふれる文化、娯樂
蹴球用具もいま本國から

進駐軍からの廃取廿一件

女農夫に強制供出五千圓

車道では轢かれ損

新生糸大検査場

東洋一の進駐キャバレー 近日デビューす

これも生糸検査所の一階、蔵書が約三千冊。——③
軍隊用に出版されたポケット型の縮刷版が多く
探偵小説、怪奇小説がいちばん喜ばれ、
恋愛小説はあまり読まれていないとか

3. 占領軍と神戸のまち

想起しがたい占領下神戸の記憶

都市の外貌が更新されるにつれて、記憶も変わっていく。出来事の性質や出来事との関係性にとらわれず伝えていくためには手がかりが必要だ。かつて地域に関わった人びとのくらしの記録や記憶もそのためのリソースにになるだろう。

たとえば、占領の記憶は、現在もっとも想起しがたいものかもしれない。学校教育では戦後期を学ぶ。十分に時間が割かれているとは言いがたいうえに、空襲→闇市→都市再建→高度経済成長→…という流れで、日本全体の政治と経済を主とした話が続いていく。米軍が日本に進駐を始めた、と言えば沖縄や横須賀や佐世保が思い浮かぶが、そもそも時間的・空間的に離れた出来事への当事者感覚は育ちにくい。

地域の年長者と話すなかで“進駐軍”のあれこれを伝え聞くこともある。とはいえ、現在話される内容は60〜70代の方の幼少期の記憶に基づく個別的なものが多いように感じる。同時代的にもプレスコード（1945年〜1949年）の影響か、彼らの生活や決定事項以外の行動・考え方に関する報道は少なかった。神戸の主だった接収地と地域住民のせめぎあい、施設の利用などはこれまで正史に表われていないことも多いが、当時の報道などを通して見ることができる。

なお、「進駐軍」は連合国占領軍への否定的感覚を和らげるためにと、日本政府と報道機関がGHQから指導された言葉である。したがって、本論考では新聞記事の引用等における“進駐軍”の表記を除き、占領軍と記すものとする。

神戸への占領軍の進駐開始

敗戦した日本には、連合国占領軍（General Headquarters = GHQ）がやってきた。連合国占領軍の第一陣は1945年8月30日、空輸部隊で厚木に到着した。9月2日に東京湾内の戦艦ミズーリ艦上で正式な降伏文書の調印が行われ、米第8軍の一部が横浜（神奈川県）、館山（千葉県）に上陸し、GHQによる日本の占領が始まった。同月からGHQによる日本管理体制も具体方針が決められ、メディア検閲も始まった。

新聞紙上でも神戸においてもいかなる姿勢で占領軍を迎えるかと意見が交わされ、緊張が高まるなか、神戸市内に彼らが姿をあらわしたのは、焼け跡に玉音放送が流れた8月15日から1ヵ月余りが経った9月25日のことであった。

9月25日から和歌山に上陸した米第6軍は京都に司令部を開設、西日本の占領が始まった。同日、第33歩兵師団約1万5000人の約半数が神戸へ向かい、まもなく三ノ宮駅に到着。翌日にかけて宝塚、姫路、西宮方面へと展開した。10月15日には1万1000人が進駐、同月末にはスコット中佐を司令官とした神戸軍政中隊が設置された。

神戸市内の軍の中枢管理組織である神戸基地司令部は旧居留地の焼け残った神港ビル（生田区海岸通8）に設置された。阪神国道から三宮駅前広場に到着した自動車部隊700名は、神戸海運局内海運監理部、旧生糸検査所、神港相互館などの宿舎に入り、警備兵を配して後続部隊を待った。焼け残った堅牢建築物が集まっていた同ビル周辺の旧居留地には神戸ベースが置かれ、戦災ビルの大半と港湾施設が大規模に接収された。また、占領軍将校宿舎としてまずは灘区から現在の中央区にかけてのホテル、次に阪神間の個人所有の住宅が多数接収された。

大丸百貨店は当初2階から6階を宿舎に使用され、表玄関にトラック、ジープが並び、米兵の歩哨が立った。建物接収やキャンプ設営が進み、宿舎としての接収を免れたのちも、大丸新館の地階と1〜3階には1946年4月から6年にわたりP.X.（Post Exchange―軍内の酒保）が置かれた。

接収地と地域住民のせめぎあい“イースト・キャンプ”

イースト・キャンプは白人兵の駐留地であり、葺合区御幸通、八幡通、磯上通、浜辺通の大部分、磯辺通の一部を含む約31万㎡にも及んだ。1946年1月1日に接収が始まり、接収解除は1953年4月30日、1954年6月15日、1956年12月10日の3次にわたった。

この広大な敷地確保に際しては、葺合区の御幸通、磯上通の1丁目から8丁目の住民に対し、唐突な立退き命令が出された。1945年12月23、24日には“進駐軍”は葺合区役所に対し、同地域に居住したバラック生活者132戸、462名を移転させるよう命じた。移転を余儀なくされ

f. 1948年　三宮地域の広大な接収地「イースト・キャンプ」と神戸基地司令部
（f：国土地理院 USA-M18-4-59（1948）より筆者作成）

た戦災者のために、区役所と葺合署の協力で仮収容所の設置がはかられることとなったが、立退き対象地域の132戸は期限通り、近辺のバラックに自主的に移転、分宿していた。

このキャンプ設置時に退去命令を受けた住民の一人である小林正信は、1945年末の立退きの様相を以下のように回顧した。

> “防空壕から這い出してやっとバラックを建てたのに、昭和20年12月25日、年内に立ち退くようにとMPと警察官がやって来た。たった6日間の余裕である。敗戦国のわれわれには何の文句をいう暇もなく立ち退かされた。といっても行く先のあてもない。私は一坪のバラックの母屋を荷馬車に乗せ、とりあえず見つけて来た地主の名札の建ってない小野柄通6丁目（そごう東200メートル）に移って行った。その所に広く散らばっていた、防空壕・バラック住いの人たち10世帯程が、小野柄通6丁目の一角に肩を寄せ合うようにバラックを並べて建て、集落をつくった。”　小林正信『あれこれと三宮』三宮ブックス 1986年

氏は旧葺合区御幸通8丁目に生まれ、戦前から戦中、戦後を三宮に暮らした。戦前小野中道商店街で営んだ「小林酒店」が1945年6月5日の空襲で焼けたのち、そごう三宮店の20m南にほぼ場所を変えず、バラックを建てたという。同地域は戦中の建物疎開と6月の空襲被害によって、終戦時には焼け野原と化していた。とはいえ焼け跡になったまちにも、人びとの暮らしはあった。かつて自らの家のあった土地にバラックを建てて商売の再建に奔走する人、求職に動く人の姿は鳥瞰する航空写真や占領軍にはちっぽけに映ったのだろうか。ようやく資材を得て仮住まいを建てた戦災者たちに対する占領軍による立退き命令の、強制力と理不尽さが窺える。

接収地と地域住民のせめぎあい “ ウエスト・キャンプ ”

西の接収地であるウエスト・キャンプをめぐっても、接収地から発される周辺住民への命令に、せめぎあいが生じた。ウエスト・キャンプは兵庫区古湊通・西多聞通、生田区相生町ほか一帯を接収して黒人兵の駐留地として設置された。その立地はまさに JR 神戸駅から西へ約300m の距離であった。南北に走る省線神戸駅にとってこの場所は「駅オモテ」にあたり、他府県から神戸に買い物に訪れる人びとの動線を妨げるように、キャンプは広がっていた。

その西端は新開地本通の東方すぐに接した。1946年5月から6月にかけては、新開地の東側でウエスト・キャンプに近接する住宅兼店舗群に対して、衛生、風紀、美観上に支障ありとして “ 進駐軍 ” から取壊しが命じられた。この命令を受けた居住者の大半は戦災者で、160世帯、約1000名にも及んだ。すでに再建した住居や店舗を撤去されるとあって、数十名が神戸市長と兵庫県知事を訪ね、撤去命令の緩和懇請に助力を陳情した。

結果的には、交渉によって、表通りの70余軒のみが条件付きで立退きを免れた。条件とは、ウエスト・キャンプの金網と店舗のあいだ50尺（約15m）を清掃して、高さ2間（約3.6m）の板塀を立てるというもの。これに要する70万円の経費は各人の負担となった。その後、県市に請願し、1週間で行うことになった建物の除去、整地、板塀の設置のうち、建物の除去にかかる45万円は国費負担、整地と塀建設費25万円を当事者の負担とすることに落ちついたという。

4. 神戸における公共空間の “ モニュメント ”

“ その場所 ” を知るために

まちの変わる契機は災害、社会の動きのみならずさまざまである。多層的なくらしの体験や記憶について、わずかでもプロセスを知り、見聞きしていれば、わがまちを同定する一助になる。

例えば50年前の写真があったとして、付帯する情報（メタデータ）なしで、被写体のみから撮られた場所や状況を推察できるだろうか。それはとても難しい。撮影日や場所や、誰との思い出なのかを書き添えた撮影者による言語情報の頼もしさ、時代背景を学べる刊行物や統計情報の有用性を、履歴を辿ろうとする営みのなかで感じる。そして、近現代の都市の輪郭を掴むには、写真や映像や音声や絵画といった多様な媒体で残されていく記録を資料として読みとく必要もある。

刊行物や記録は発行する主体のまなざしを反映する。スケールの隔たりは不可避で、この隙間に落ちてしまう数々の対象があることも事実だ。闇市などはまさに行政にのみ記録され、時間が経ってバイアスが強まった一例でもある。画一的なイメージを複数のケースの相違点で解くと、時代や地域特性のリアルがあらわれていく。そこに生きた人びとへの聞き取りや対話も、対象と自らとの困難な相互理解を補ってくれるだろう。

さあ、予習してきた資料を携え、外に出よう。見慣れたはずの場所を視て、歩き、話しあう機会は、大小さまざまな発見をもたらすはずだ。

みなとのもり公園

三宮の駅前からフラワーロードを南へ下りて、阪神高速道路を歩道橋でくぐり KIITO に向かうと、大きな公園が現れる。みなとのもり公園（神戸震災復興記念公園）は、JR貨物神戸港駅跡地の約5.6ha に防災公園街区整備事業で2000年度から整備され、2010年に開園した総合公園。構想が始まったのは「阪神・淡路大震災記念プロジェクト」として国の復興特定事業に

認定された2000年2月から。震災の経験と教訓を後世の人々に継承するため、神戸のまちが復興から発展へと前進する姿を木々の生長とともに見つめていく公園を基本理念に、復興の記念事業として整備された。近隣に位置する市役所・東遊園地と連携した都心臨海部の“防災公園”としての役割も担っている。

園内の緑地には「神戸港駅の記憶」と題し、2003年に廃止された神戸港駅ゆかりの安全の鐘、構内の大時計、エンドレールが置かれた。大時計は、震災発生時刻に合わせた5時46分を指している。さらに奥には、被災樹木や手動ポンプが配された「語り継ぎ広場」も見える。

東遊園地

阪神・淡路大震災の追悼行事の印象が強い東遊園地には、多数のモニュメントが置かれている。モニュメントの語源はラテン語の「記念物（monumentum）」。記念碑、記念建造物を意味するが、東遊園地のモニュメントは記念する出来事も時代もさまざまである。

東遊園地は、1868年に「外国人居留遊園」として開園した日本で最初の西洋式運動公園で、当初は外国人専用であった。野球、ラグビー、サッカー、ボウリングなどのスポーツを行い、それらの近代スポーツは日本に広がっていった。1890年神戸倶楽部が建設され、外国人の社交場となり、1922年に「東遊園地」の名称となった。

東遊園地に残された出来事の痕跡を探して歩き回ってみると、22点の彫刻や記念碑や震災モニュメントがみつかる。北東からフラワーロード沿いに、スプリングストーン、シオン、加納宗七モニュメント、加納橋の欄干、スペースアイ、老人、虹の石、海の栄え。噴水の直線状に位置する洋服発祥の地記念碑を見て中央北の緑地に向かうと、マリーナ、明日の手型、エーゲ海に捧ぐ。虹の泉から南へと伸びる緩い遊歩道には、あかりの木、モーツアルト像、そのまま歩いて南西角の居留地ガーデンには、ボーリングの碑、シムの碑、モラエス翁像、阪神・淡路大震災の記憶がある。また、東へ向かうと、1.17希望の灯り、震災と復興のモニュメントに辿りつく。そして道を距てて南には、仔馬の像、KAWASAKI への道が置かれている。

“モニュメント”の転換点

さて、「モニュメント」が身近な存在として認識され始めたのは、1995年の震災以後ではないかと思う。神戸市では、1968年から「神戸須磨離宮公園現代彫刻展」、続いて「神戸具象彫刻大賞展」という大規模な彫刻展を行い、花と緑と彫刻のあるまちづくりが積極的に展開されていた。三宮のフラワーロードでは「都市美」を掲げて街路拡幅整備と彫刻設置が一体に進められ、1981年に竣工した「花と彫刻の道」は都心の中央軸として多くの人が往来する街路である。

神戸市内に二つの「彫刻の道」があることはご存知だろうか。「みどりと彫刻のみち」は、神戸文化ホールの開館（1973年）に合わせて、1973年～1988年にかけて湊川神社西側に整備された歩行者空間である。「花と彫刻の道」は、ポートアイランドの完成を記念した博覧会「ポートピア '81」に併せて、1979年～1981年にフラワーロード沿いに整備された。

現在、市内には500点以上もの彫刻作品が設置されているというが、震災後の1998年にビエンナーレ形式で30年間続いた現代彫刻展は終わりを迎え、新たに設置される彫刻は減った。その主因には予算が挙げられたほか、「文化事業における公園緑地の利用は、防災公園としての機能に優先された」との指摘も見られている[8]。

三宮の東遊園地は市役所に隣接した都市公園として、震災後には救援物資の中継基地としても利用された。公園等の空地に仮設住宅が建てられた際には、園内の彫刻が立地に根差すメッセージを持つか否かが問われ、「洋服発祥の地記念碑」はかろうじて移設を免れた一つという。震災は、各所に置かれていた彫刻をそれまでと異なる「場所性」という基準でふるいにかけた。それは、都市美からモニュメント性やメッセージ性へと文脈を変える影響を及ぼしたのかもしれない。

また、公園や街路等の公共空間における出来事の痕跡を一つひとつ見てみると、時代を追うごとにモニュメントの設置主体が官から民へと変わってきていることも読み取れる。都市空間におけるつくる側とつかう側の境界が20世紀末に揺らいだ、その表れでもあろう。

“震災モニュメント”の発生

そして一方で「震災モニュメント」が1995年から各地に設置されるようになった。現地調査により震災モニュメントマップを作成した NPO 法人阪神淡路大震災1.17希望の灯り（HANDS）は「震災モニュメント」の概念を下記のように示している[9]。

g. NPO 法人阪神淡路大震災1.17希望の灯り（HANDS）「震災モニュメントマップ2002」（g:筆者撮影）

そのモニュメントを通じて、阪神・淡路大震災を語り継ごうという意思を表明して建てられたもの。具体的には次のポイントで判断しています。

1. パブリックスペース（例えば公園、学校、道路）にあるか、プライベートスペース（例えば寺、神社、墓地、個人宅）にあっても一般の人が見たり、参ったりできるようになっていること。
2. その形を問わない。立体的であっても平面的であっても植物であっても構わない。
3. 「震災を語り継ぐ意思」をそのモニュメント上か、近接した説明板などで説明してあること。それがない場合でも震災を語り継ごうという意思を受け止めることができることが望ましい。

震災モニュメントは1996～2000年に多数の設置が見られ、2010年までには300基以上にも設置数が及んだ。このうち、寺社や氏子など宗教関係者によるものが112基、自治会やまちづくり協議会など地域住民の集まりによるものが50基。また、地表に出現した断層をありのままに保存した「北淡震災記念公園　野島断層保存館」や、被災した構造物そのものを保存した「神戸港震災メモリアルパーク」「阪神高速道路震災資料保管庫」もある。そうした見方では、東遊園地で毎年1月17日に行われる「1.17のつどい」や12月のルミナリエや各地で実施され続けている数多くの鎮魂・追悼イベントもまた、仮設的な震災モニュメントともいえる存在である。

5. 都市空間の変わる契機―神戸というまちの戦後

戦後神戸というまちのあゆみ

戦災都市は日本全国似た傾向で、戦災復興に始まる戦後を歩む。神戸の特徴としては、立ち止まって顧みることのできるタイミングを逸してきた、もしくは次の命題を見つけて邁進してきたということが挙げられるかもしれない。

神戸というまちの戦後をクロノロジカルに眺めると、戦災復興が進み神戸港の整備が要されて1950年には神戸国際港都建設法が施行される。同年の神戸博覧会、1956年の兵庫区民体育大会などを機として公園と関連道路の整備に伴うバラック街の立ち退きが図られ、接収解除後の1956、57年に神戸新聞会館・国際会館・市役所の3棟が三宮に竣工。一方で三宮駅前には木造低層家屋が密集し、個人建替えによるペンシルビルの乱立も始まり、都市防災・景観上の問題を改善するべく、1965年には神戸市総合基本計画が策定され、三宮が都心と位置付けられた。商業・業務・娯楽・交通ターミナルなどの諸機能を配した「神戸の顔づくり」が進められ、1960年代後半になると区画整理や再開発の勢いが加速、三宮地区市街地改造事業や三宮地下街建設等の都心整備も進んでいく。

1970年代には「山、海へ行く」として知られる開発手法で、山地を切り崩した臨海部の埋立地造成とともに、土砂採取後の丘陵地も開発された。狭い神戸の市街地には商工業・住宅・港湾用地が生み出され、都市インフラは拡充・整備されていく。1980年代にかけてニュータウン開発やポートピア '81に向けた都市整備や環境改善への取組みが高まり、その間にも都市空間は更新され続けてきた。

豪雨や台風による風水害はしばしば生じていたが、自然災害からの復興やその原因の克服は都市整備のモチベーションにもなるため、歩みは鈍らない。高度成長期、引いては戦災復興以来の立ち止まらずふりかえらないその都市経営手法は「株式会社神戸市」とも呼ばれた。この一連の流れで新たなヴィジョンを選び掲げてきた主体は「官」であった。しかし、1990年代初頭にはバブルが崩壊し、安定成長期も終わったさなかの1995年に阪神・淡路大震災が発生した。

災後の変化――伝えたい衝動の発露

頻繁に更新されるまちは、そこに暮らす人びとの記憶も上書きしていく。

生きることは選択と努力とその結果を受けとめる体験の積み重ね。つらい出来事も、時間を経ると各人にとっての意味が変わる。消えない記憶も一色から多色になったり、またその逆もあるかもしれない。日々を生きて暮らすのは無意識ながら、それだけ“大変”なことだ。忘れないと誓わなくても覚えているのが当事者。忘れてしまっても何かの拍子に蘇る記憶は間違いなどではない。たとえそれが客観的には事実と異なり、脚色されていても――そう感じる。

そしてまた、記憶や体験を教訓として伝える、伝わるためには、何らかの「しるし」が必要である。その役割を担う記憶の表象や記録は、様々な媒体、形態で私たちのまわりに残されている。

都市開発愛の強さが特徴的な神戸では、1995年に震災が生じて初めて本気で、集合的記憶の喪失というクライシスやその重要性が考えられはじめたのではないかと感じる。震災の発生したのは1995年1月17日。戦後50年というふりかえる機会を目前にさまざまな思い出の品や記録が失われた体験は、足跡を残し伝えることの大切さを多くの人びとに思い知らせた。

阪神・淡路大震災に際して生み出され、集められた記録は膨大なものであった。神戸市や兵庫県などの被災した地方公共団体、消防や都市計画の所管部署は公式記録を意識的に保存し、5年後や10年後を機に復興のプロセスを含めて編纂した報告書等の記録が刊行されている。記録を残したのは行政だけではない。自らの暮らしの状況や想いを綴る人、まちを歩き撮影する人、復興計画のために意見を交わし図面を引く人、離れた地域から支援に訪れたボランティアを管理するために書きつける人、仮設住宅の交流会のチラシを作る人などさまざまな人びとが記録し、

それを“資料”として保存した。地域の人びとの従前の暮らしにあった“震災資料”の救出活動も行われ、多様な記録は「震災資料収集活動」という事業や図書館やボランティア団体や行政によって収集された。

災後は、人びとの暮らしにとっては言うまでもないが、各種資料をめぐる環境にとっても激動期である。被災直後の記録は集められなくては残らない。1995年は日記が飛ぶように売れたという。2011年は被災地を撮影した写真がネット上に溢れた。膨大な既存の資料が失われ、新たな記録物が生み出される。記憶や体験を教訓として伝える、伝わる役割を担う記憶の表象や記録は、さまざまな媒体、形態で多層的に私たちのまわりに残されている。残したい、伝えたいことを意識する契機は、個々人のコントロールできない諸力によって訪れるのかもしれない。

災後、復興期のくらしの記憶

戦災や震災や他の災害について生存や復興のプロセスを見ていると、それらの生活環境に、時空間を超えた普遍性を感じる。人間の性として、大きな喪失感と生き残った昂揚感を個々人が抱えながら「復興」という至上命題に導かれて走っているあいだは振り返れない、そういうものだろうか。

過ぎ去ってしまう何かを残したいという感情は、「断絶」とも言えるほど自らを取りまく環境が一変したときにこそ発露する。それには戦災や震災といった、個の力では抗えないスケールの外的要因が例として挙げられるだろう。また、復興期や徐々に変わる上向き、下向きの環境では出来事を俯瞰して捉え難いもの。したがって、記憶も記録も曖昧にならざるを得ず、出来事の真っただ中ではない場所／時間から照射されることが多々ある。

h

i

h. 1995年3月　被災地のボランティア活動の記録を集め始めた地元NGO救援連絡会議文化情報部のチラシ（『文化遺産救援ニュース』第5号所収）1995年10月 ㈶阪神・淡路大震災記念協会による震災資料収集時のチラシ
（h, i：人と防災未来センター所蔵）

出来事や集合的記憶を媒介する都市空間

50年前の1965（昭和40）年ごろの神戸にしても、まだ生まれていなかった私たちはリアルには知らない。父母の年齢に近い50〜60代の方々も、こんな感じだったかなあ、俺はここよく覚えてるよ、と言ってこのころの写真と今とを見比べていた。神戸というまちでは1965年以降急速に都市開発が進み、1995年以降は震災復興の時代となった。戦後70年余においても都市は明らかに変わっている。それは、写真と日常目にする風景の相違からも読み取れる。

そして、写真に限らず、実際に歩いて目に入る風景や、地図や書かれたテクストや人の声などさまざまな資料を通して、まちへの気づきを得ること。それは、凝り固まった閉鎖的な体系を解き、思惟や行動をさまざまな可能性に向かって解放する試みの一つであるはずだ。

日常生活の空間や場所を同じくする人びとの集合的・社会的な行為や刺激を介在した記憶を「集合的記憶」という[10]。それは固定的なものではなく、過去の再構成と集団社会における個々人のアイデンティティ強化によって流動的に判断されなおすもの。また、記憶の保存場所や想起の契機には、共通認識・記録媒体の参照、物質・空間との結びつきが欠かせない。都市空間も同様に媒介的性格と不可分なものである。

三宮を25人で歩き話している最中にも、歩き終えてからも、イースト・キャンプのあった場所に喪失や欠如を感じたとの声も受けた。戦災復興事業の小さなモニュメントはあっても、接収の跡には何もない。「ない」という伝えにくいことを感じてもらえたのであれば、今回の試みは成功だ。可視の痕跡だけが出来事の痕跡ではないことを示唆し、いまは不可視となった失ったものの存在や消滅の経験への感度を高めるのは、アートの領分であり可能性かもしれないとも思う。

ふわふわと有機的かつ流動的に存在する誘導されがちな集合的記憶を収める器や受けとめて位置づける装置的役割を果たす人が、いつかどこかで現れるか。都市のリテラシーは人的資源の可能性に懸かっている。

1 松平誠『ヤミ市――東京池袋』（生活学選書）ドメス出版　1985年
2 猪野健治「連載：東京闇市興亡史」『創』1977年1月号
3 橋本健二・初田香成編著『盛り場はヤミ市から生まれた・増補版』青弓社　2016年
4 鳴海邦碩『都市の自由空間―道の生活史から』（中公新書）中央公論社 1982年
5 レイ・オルデンバーグ『サードプレイス』みすず書房 2013年／サードプレイスの特徴＝中立領域、平等主義、会話が主たる活動、アクセスしやすさと設備、常連・会員、控えめな態度・姿勢、機嫌がよくなる、第2の家
6 マイク・モラスキー『日本の居酒屋文化 赤提灯の魅力を探る』（光文社新書）光文社 2014年
7 橋本健二『居酒屋ほろ酔い考現学』毎日新聞社 2008年
8 石崎奈美ほか「阪神淡路大震災を契機とした公園緑地における野外彫刻設置の変容に関する研究」『ランドスケープ研究：日本造園学会誌』第69巻第5号、2006年3月
9 （参考 URL）http://117kibounoakari.jp/work.html
10 M・アルヴァックス『集合的記憶』行路社　1999年

p.6　1968年9月 取り壊される神戸タワーと1965年に竣工したポートタワー（神戸市文書館所蔵）

Report

三宮 まち歩きのススメ

vol. 002

海から山へ。第2回フィールドワークで歩いたコースを紹介します。
当日はかつての風景写真と地図を手に、解説を聞きながら、三宮を右へ左へ。
歩き慣れた三宮も、ここを舞台にした出来事を知るとまた新鮮な印象です。
さあ、タイムトラベルへ。

START

①

②

③

TIME TRAVEL

④

①1932年竣工の旧国立生糸検査所(新館)1階の総荷取扱場の様子(神戸農林規格検査所編『神戸生糸検査所史』1982年) ②1995年1月 神戸市役所から望む震災後の三宮フラワーロード ③1995年1月17日 米田定蔵氏撮影、震災直後のさんプラザと交通センタービル ④1953年9月26日 台風第13号後の三宮センター街。日除けのために張っていた葭簀が吹き飛び、道端に集め積まれている。⑤1938年 阪神大水害で新生田川が決壊、旧生田川の瀧道にも濁流と土砂が流れ込んだ。そごう前には避難する人びとが見える。⑥1995年1月25日 生田神社の東に沿って南北に伸びる東門街も大きく被災。 ⑦1955年頃 神戸ムスリムモスク。戦災にも震災にも耐えた。

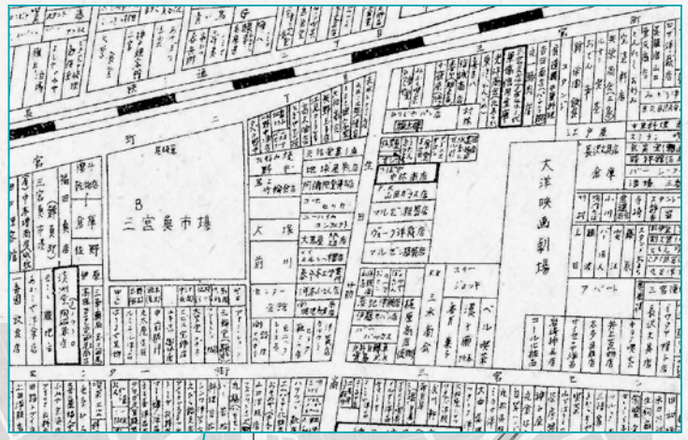
①③⑤⑦神戸市文書館所蔵 / ②④⑥人と防災未来センター所蔵(0000017-001001, 0000072-001001, 2300120-000003)

⑤

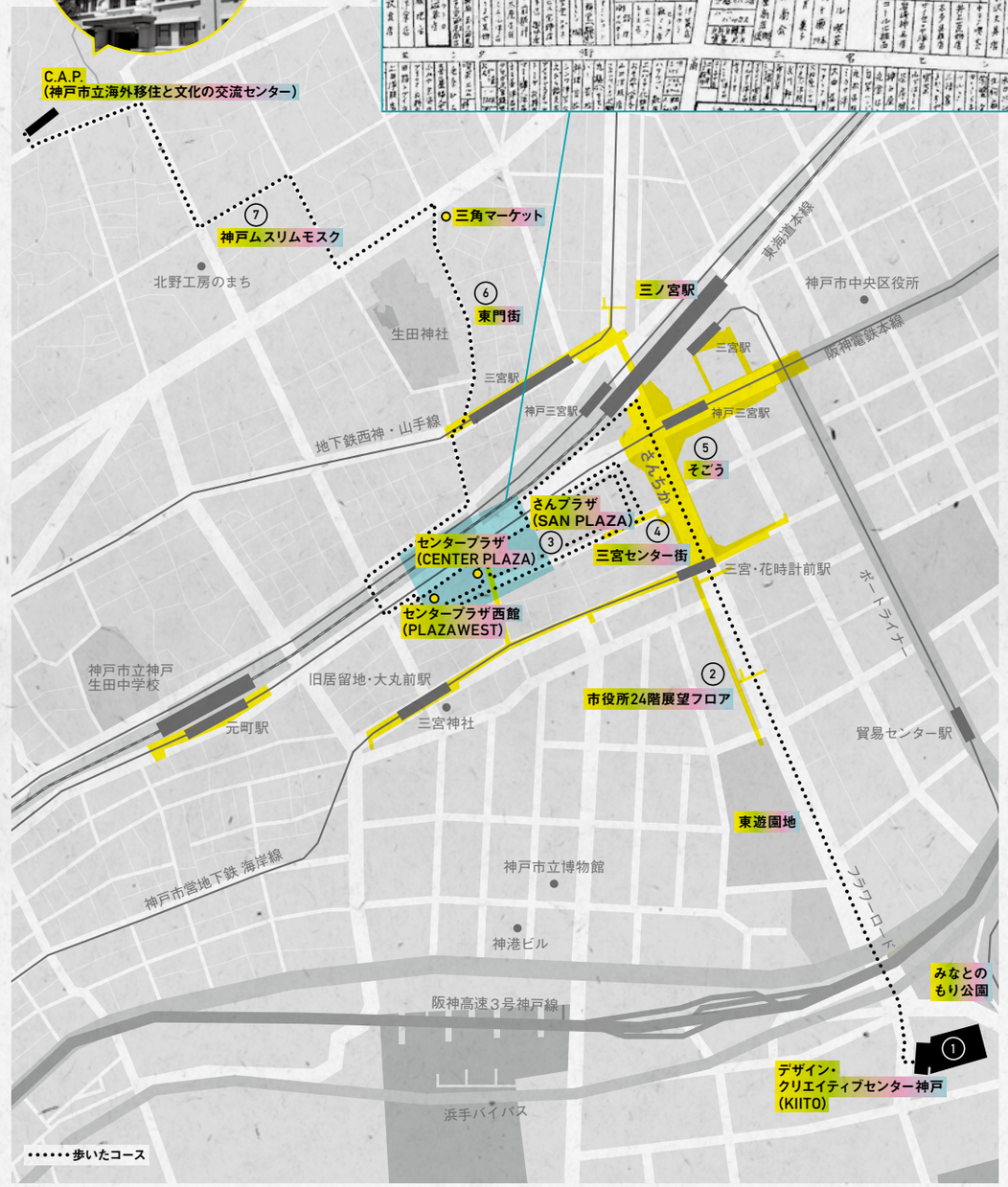
⑥

⑦

1956年の三宮町界隈(神戸地学協会『神戸市全産業住宅案内図帳・生田区』1956年)



GOAL



フィールドワークで歩いたコース

Report

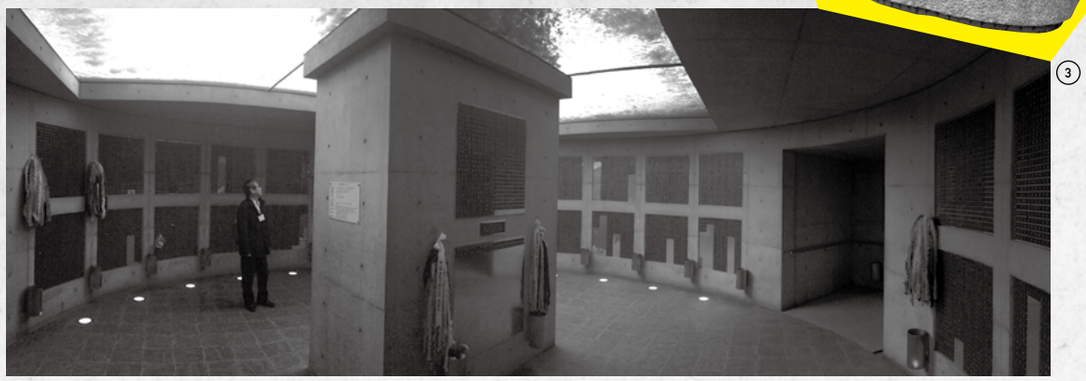
vol. 003

都市のあゆみを刻むモニュメント

第2回フィールドワークでは、グループに分かれて
東遊園地周辺に点在するモニュメントを探し、写真を撮る時間を設けました。
次々と見つかるさまざまな時代のモニュメントに参加者もびっくり。
東遊園地のどこにあるか、みなさんはご存知でしょうか。

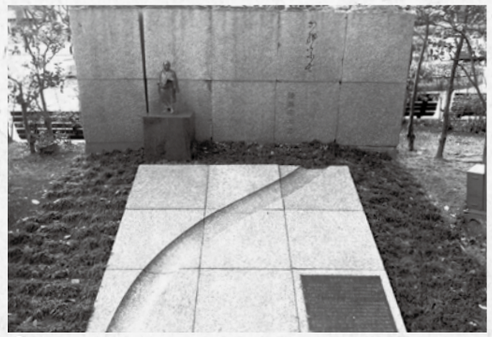
① ボーリングの碑
② 震災と復興のモニュメント
③ 日本近代洋服発祥の地記念彫刻
④ 加納宗七像と加納町の由来を示すモニュメント
⑤ モラエス翁像
⑥ 没後200年記念モーツアルト像
⑦⑧ 阪神・淡路大震災の記憶（震災による地盤沈下の保存）
⑨ 戦災復興土地区画整理事業の記念碑

①



②

③



④

⑤

⑥

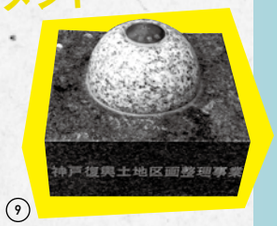
⑦

⑧

ほかにも、

20点以上のモニュメント

「命の灯台」、
ブリスベンから贈られた銘板、
三木瀧蔵氏が神戸生糸取引所理事長退任時に寄贈した噴水、
震災復興の願いを込めイタリアのオリーブ協会会長から寄贈された
オリーブの記念樹
など



⑨

j. 1970年5月 空から見た三宮（j：神戸市文書館所蔵）

神戸スタディーズ #4

“KOBE”を解す

せめぎあいにみる神戸の都市史

開催概要

第1回 2016/1/27(水) 19:00–20:30
レクチャー「概論:近現代神戸　都市のなりたち・人びとのくらし」

第2回 2/6(土) 14:00–18:00
フィールドワーク「商業のまち・復興のまち　三宮」(協力:C.A.P.)

第3回 2/13(土) 16:30–18:00
トークセッション「過去から未来へ:まちの変わる契機」

神戸スタディーズ#4を終えて

芹沢高志

私たちはいったいどんな場所に生きているのか？ この素朴な好奇心こそ、「神戸スタディーズ」の核心にほかならない。

ステレオタイプな神戸のイメージを捨て、地形、地質、水象、気象から歴史、文化まで、自然科学、人文科学の垣根も超えてさまざまな角度から光を当て、「神戸」という場所の姿を浮き彫りにしていく。ここで育まれる「場所の感覚」が重要だろう。

情報化が激しく進む現代社会にあっては、自分たちが日々そこで生きる土地なり場所なりもが、抽象化され、相対化され、数値化され、分類され、最後には消費されていきかねない。私たちはこれまで以上に「場所の感覚」、つまり場所に対する感受性を必要としている。私たちは抽象空間に生きているわけではない。おそらく「場所の感覚」とは、生と密着した創造力の源泉のひとつであるはずだ。デザイン・クリエイティブセンター神戸として、「神戸スタディーズ」に取り組む理由がここにある。

神戸スタディーズ#4では気鋭の都市史・社会史研究者、村上しほり氏をお迎えし、近現代における神戸都市空間の変遷を追ってみた。もちろんその歴史は興味尽きないものだったが、今回は村上氏のアプローチそのものを広く共有したいという想いも強かった。氏は神戸に生きる人々の声を丁寧に拾い、そこから歴史的資料を読み解いていく。その姿は「まちを聴く」とでも言えばいいだろうか、見えにくいかすかな痕跡や人々のつながりを手掛かりに、まちを解していくのである。根気のいる「手仕事」だ。

3回のレクチャーやフィールドワークを通して、あらためて神戸の災害の歴史に意識が向かった。水害、戦災、震災と、神戸は大規模な喪失を繰り返してきたわけだが、そのたびに、過去を振り返る余裕もなく、前に向かって歩み続けた。時々、重要な歴史的遺構もほとんど残されていない神戸に、歴史に対する執着のなさを感じたこともあったが、執着がないというより、こうした事情が生み出した状況であるのかもしれない。

個人的には占領下の神戸の紹介が特に印象深かった。ここデザイン・クリエイティブセンター神戸、KIITOにもその痕跡が残っており、彼女はその壁の消えかけた表示を指差して見せた。急に歴史が生々しく立ち上がり、今回レクチャーの醍醐味であった。占領下、とくに基地が置かれた地方都市の当時の状況は、人々もあまり語りたがらず、このままでは記録も不十分なまま失われていく可能性がある。少し前に『別府と占領軍—ドキュメント戦後史』（「別府と占領軍」編集委員会、1981年）という佐賀忠男氏の労作を手にしたことがあるが、このような努力が今、各地で求められている。まだかろうじて間に合うからだ。

村上氏の話を聞き、彼女に連れられてまちを歩き、まちは生きものだとつくづく思う。そのしたたかな生きざまもそうだが、出たとこ勝負で生まれるさまざまな創意工夫が重なり合う重層性も生きものを思わせる。神経生理学者ポール・D・マクリーンが提唱した「三位一体の脳」という考えがある。私たちの大脳もそれぞれの時代に形成された爬虫類脳、旧哺乳類脳、新哺乳類脳が下から上に重なって存在し、それらが協働してひとつの脳として働いているのだという。たしかに生きものはその身体を使いながら、自らの身体を変えていかねばならない。より現代的なデザインを思いついたからといって、すべてをご破算にしてゼロから新デザインに乗り換えることはできないわけだ。もっとも新しい層ばかりが目につくが、村上氏はときどき、そうした表面を静かにめくり、その下に潜む都市の古層を垣間見せてくれた。

まちそのものが示すダイナミズムを肌で感じた神戸スタディーズ#4であった。

「神戸スタディーズ」とは？

「神戸ってどんなまち？」と聞かれて、あなたはなんと答えるでしょうか。
さまざまに語られる神戸というまちのイメージをあらためて考えるため、
多様な専門分野の方を講師に迎え、これまでなかった視点で神戸を見る「神戸学」をつくる試みです。

講師

村上しほり

都市史・社会史研究者

人と防災未来センター　震災資料専門員
神戸大学大学院　人間発達環境学研究科　研究員
1987年神戸市出身。2014年神戸大学大学院修了。博士（学術）。語り継がれなかった地域の形成経緯と変容の契機に着目し、戦災復興過程・占領期の神戸に関する都市史を研究。共著に『盛り場はヤミ市から生まれた』（青弓社、2013年）、論文に「三宮東地区「三宮国際マーケット」の形成と変容過程について―戦後神戸におけるヤミ市と市街地形成に関する史的研究」（『日本建築学会計画系論文集』第78巻第693号, 2013年）など。

モデレーター

芹沢高志

デザイン・クリエイティブセンター神戸
センター長

1951年東京生まれ。89年にP3 art and environmentを開設。99年までは東長寺境内地下の講堂をベースに、その後は場所を特定せずに、さまざまなアート、環境関係のプロジェクトを展開している。2014年より東長寺対面のビルにプロジェクトスペースを新設。とかち国際現代アート展「デメーテル」総合ディレクター（02年）、アサヒ・アート・フェスティバル事務局長（03年〜）、横浜トリエンナーレ2005キュレーター、別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」総合ディレクター（09年、12年、15年）、さいたまトリエンナーレ2016ディレクター。

神戸スタディーズ#4
「"KOBE"を解す―せめぎあいにみる神戸の都市史」

執筆　村上しほり, 芹沢高志
発行　2016年3月
デザイン　水上英子（シルシ）
編集協力　竹内厚（Re:S）

編集・制作・発行

KIITO
DESIGN AND CREATIVE CENTER KOBE

デザイン・クリエイティブセンター神戸
〒651-0082　神戸市中央区小野浜町1-4
TEL:078-325-2201
http://kiito.jp/

本書の無断転写、転載、複製を禁します。
© 2016 Design and Creative Center Kobe All rights reserved.